

日本民家園 花便り 12月号 (2)

～暮らしと植物～ 化粧

天下泰平の世となった江戸時代、庶民の間にも化粧が流行しました



ハゼノキ 檜の木 鈴木家裏ほか
ハゼの果皮から油脂分を抽出したものが木蠟。それに植物油と香料を混ぜ固形状にしたものが「びんづけ油」。これにより様々な髪型が可能となりました。木蠟は西南諸藩の財政を立て直すための専売品でした。



キフシ 木五倍子 井岡家ほか
お歯黒とは、キフシのほかハンノキなどタンニンを多く含む果実の粉を歯につけ、次に酢酸などで鉄を酸化させた液・鉄漿(かね・てつしょう)を塗って歯を黒く染めることです。江戸時代、既婚婦人の印でした。



クス 葛 原家裏ほか
紅(べに)とともに重要な化粧料であった白粉(おしろい)。古くから、鉛などを原料とした鉱物質の白粉が主流のなか、麦粉・米粉・葛粉などの植物質の白粉も用いられていました。



ヌカ 糠 原家裏
玄米を精米にする段階で出る糠(めか)、その糠で洗顔をすると角質を落としながら肌に潤いを与え、そのうえ美白効果もあるという究極の美顔料でした。「へちま水」や「うぐいすの糞」も人気があったそうです。



ベニバナ 紅花 (園内にはありません)
紅花の花弁を踏み揉みして雑汁を除いた後、天日干しの行程を経て口紅の原料となる紅餅ができます。「紅一匁(もんめ)金一匁」と言われるほど高価なもので、裕福な人々しか使用できませんでした。